

つらいときこそ社は・社訓が
心の支えとなる

『できる会社の社は・社訓』

紹介者／御代川善朗氏
アステラス製薬株式会社
コーポレート・オフィサー
上席執行役員 経営管理担当



「私が入社した1975年当時は、会社の朝礼や研修で毎日のように、社は・社訓を復唱させられていました。『得意のときに油断するな、失意のときに落胆するな』『常に一步前進』（山之内製薬当時）など。我々の世代には、いまもって忘れられない社は・社訓があります。しかし、時代は移り変わり、いまや唱和するような時代ではなくなってきました」と御代川氏。アステラス製薬で人事部を含む8つの部署を統括する御代川氏が、改めて社は・社訓の重要性を意識しはじめたときに、偶然書店で見つけたのが本書だという。

同社は、2005年に旧山之内製薬と旧藤沢薬品工業が合併して誕生した。「合併前に経営理念を作りました。しかし、経営理念の書かれた小冊子を配布して身に付けさせていますが、どうもみんなに浸透しない。それでは意味を為さないのではないか、というのが私の素朴な疑問でした」

本書で御代川氏が興味を引かれたのが、日本電産の三大精神の一つ「すぐやる、必ずやる、できるまでやる」だ。「創業者社長・永守重信氏のオリジナリティを感じさせてくれます。他社が使っても変わらないものは、やはり伝わりません」と語る。

「弊社も合併から5年目を迎え、モットーに近い社は・社訓を作りたい。人間は好調なときには必要ないのですが、困難な状況に陥ったときこそ社は・社訓のような心の支えが必要だと思います」



著者／千野信浩
新潮新書
680円（税別）
2007年4月刊行

100年後の日本の人口は3分の1に？
育児支援が今後の業績を左右するか

『少子化克服への最終処方箋』

紹介者／堤ゆう子氏
株式会社フジスタッフ
執行役員 事業推進部長



2006年12月国立社会保障・人口問題研究所から、100年後の日本の総人口は現在の3分の1程度になるとの推計が発表された。本書は、少子化対策で政府、企業、個人、地域それぞれが果たすべき役割について、その強化のための具体策を提言している。

堤氏は著書の一人、渥美由喜氏からの取材をきっかけに本書を知り、「何度も繰り返し読んだ」という。「弊社は派遣スタッフ不足をきっかけとして、人材派遣業界でいち早くワーキングマザー支援に取り組んできましたが、この本との出会いで我々の仕事に対する社会的ニーズや自分の使命感が明確になり、迷いが吹っ切れました。4年間の成果として、会社の売上げ、知名度、派遣スタッフの満足度において良い結果が得られました」と堤氏は語る。

本書は、ボリュームやテーマの割にさらっと読み、人事担当者や経営者向けに特にお勧めなのが第4章の「先進企業のワーク・ライフ・バランス戦略」だと堤氏。「最近の不景気で『育休中の解雇』が問題になっていますが、子育てを経験し人間的にも成長した女性の力を生かさないのは会社にとって大きな損失です。長期的な視野で労働人口の減少を捉え、育児支援はコストではなくてハイリターンの投資であることに気づいた会社から、今の長いトンネルを抜けることができるのではないのでしょうか。今こそ本気で育児支援やワーク・ライフ・バランス戦略に取り組む時期かもしれません」



著者／島田晴雄、渥美由喜
ダイヤモンド社
1800円（税別）
2007年2月刊行

過去と未来を鉄の扉で閉ざす 今日一日をどう生きるかが大切

『道は開ける』

紹介者／丸山高見氏
アサヒビール株式会社
執行役員 人事部 人事部長



本書は、あらゆる人間に共通する「悩み」の実態とその克服法について述べている。世界各国で翻訳され、日本国内だけでも280万部以上を売り上げた世界的ロングセラーである。「著者のカーネギーが生まれたのは1888年。もう100年以上前に誕生した人物が執筆した作品ですが、現代の人にも昔と変わらず受け入れられると思います。私にとっては苦しいときに服用する薬のような本です」と丸山氏。

著者は悩みを克服するための28個のテーマを掲げ、それをもとに話を進めていく。丸山氏にとって、印象深かったテーマは、最初の「過去と未来を鉄の扉で閉ざせ。今日、一日の区切りで生きよ」だという。「彼は“息絶えた過去”という表現をしていますが、過ぎ去った過去について、こうすればよかったと悩み続けることは本当に有害ですよ。また、未来に対して配慮することは必要ですが、今日一日をどう誠実に、一生懸命生きるかのほうが大切。その積み重ねが未来だとこの本は教えてくれます」

もう1つが、「自己を知り、自己に徹しよう」だという。「自分らしくあるということ。『自分はダメだ』と言う若手社員が時々いますよね。しかし、よく聞いてみると単に知識がない、技術がないということ。いずれも努力すれば後天的に身につくものなのに自分自身を否定してしまうんですね。生まれ持った自らのDNAを大事にしながら、いま足りないのは知識や技術だと認識してほしいです」



著者／D・カーネギー
香山晶（訳）
創元社
1600円（税別）
1999年10月刊行

1つのビジネス事象が抱える 様々なリスクに気づくか否か

『ビジネスマンのための法務力』

紹介者／箕浦聡司氏
株式会社ニチレイ
人事総務部長



企業の法令順守やCSRが重要な課題になっている。また、企業が法的リスクに足元をすくわれるケースが増えている。外資系金融機関で社内弁護士を務める著者は、企業が足元を固め、攻めのビジネスに転じるためには、第一線のビジネスパーソン自身が法務力を身につけることが大切だと述べる。

「昨今、内部統制だ、リスクマネジメントだと叫ばれていますが、結局ビジネスの世界はリスクを取らなければ成功ありません。あらゆるリスクに対して防御だけして、閉じこもってはダメです。1つのビジネス事象が抱える様々なリスクにいかにか早く気づき、それらを上手にコントロールするかが大切だと思います」と箕浦氏。

本書は、法務力を鍛えるための6つのコツを挙げている。その中の1つ、記者会見テストでは、自分が記者会見の場に引っ張り出されたとして、記者たちに突っ込まれたらどうするかをシミュレーションする。「記者会見まで考えることはなかなかできませんが、企業は外部に対して説明責任を負っています。きちんと説明ができるかどうかで、会社の命運が左右されかねません」

特に管理職になる一歩手前の人に本書を読んでほしいという。「立場が中堅以上になると、自分で判断して動く場面が多くなります。法務担当者や弁護士に任せきりにするのではなく、自分なりに解釈してから相談する当事者意識が必要だと思います」



著者／芦原一郎
朝日新書
740円（税別）
2009年1月刊行